

琉球弧における船と樹霊信仰

松尾恒一

Ships and Tree Spirit Belief in the Ryukyu Islands Arc

MATSUO Koichi

はじめに―船霊とオナリ神―

① 船大工と船霊・木霊の祭祀と呪法

② 職道具による呪詛

③ 船とオナリ神と樹霊

④ 航海と女神、船体と樹霊―琉球・中国の民俗比較に向けて―

【論文要旨】

伝統的な木造船には一般に「船霊」と呼ばれる、船の航海安全や豊漁を祈願する神霊が祀られているが、琉球地域の木造船（割り舟・サバニ・板付け舟、等）の船霊信仰には、姉妹を守護神として信仰するヲナリ神信仰の影響を受けている例が少なくない。このことは、すでに知られているが、本稿では、船の用材となる樹木に対する信仰に注目して、船の守護神としての女性神の信仰とのかかわりを考察する。

船大工によって行われてきた伝統的な造船は、山中における樹木の伐採から始まり進水式をもって完成するが、その間、樹霊やこれとかわる山の神に対する祭祀が重要な作法として行われる。これは奄美大島の事例であるが、八重山地域にまで目を広げれば、船の用材となる樹木を女性と認識しているものと認められる口頭伝承（歌謡）もあり、樹木に宿る樹霊と女性神との結びつきの強さが推測されてくる。

ところで、船大工による伐木の際の、樹霊や山の神への断りの際には、斧のほか、

墨壺・墨差し・曲尺などが重要な役割を果たす。これは、屋普請を行う大工も同様で、建築儀礼の際には山の神や樹霊に対する祭祀が重要視された。船大工や大工は、その職と関わる祭儀において職道具を祭具として用いたのであるが、ときにこれらの道具を用いて呪詛をおこなうなど、シャーマン的な呪力を発揮したりした。

結びとして、こうした琉球地方の航海や船体にかかわる女性神や、造船の際の樹霊に対する信仰を、当地域との長い時代にわたる交流のあった大陸や台湾との習俗と比較した。台湾の龍船競争における媽祖信仰や、貴州省の苗族や台湾少数民族の造船儀礼など、松尾の調査した事例を中心にあげたが、今後の比較民俗に向けての視座を定めるための試論である。

【キーワード】 琉球、船（舟）、女性神、樹霊、中国・台湾の船（舟）と信仰

はじめに―船霊とオナリ神―

日本の伝統的な和船には、航海の安全を守護し、祈る「船霊様」と呼ばれる神霊が祀られている例が列島広くに多く見られる。地域による差やちがいはあるが、人形、女性の毛髪、サイコロ、六文銭などを御神体として、帆柱の根元近くに彫ったモリとかツツと呼ばれる場所に納める例が多く、帆柱のない現代の機械船には、船室に祀ったりする例なども少なくない。

船霊として中に収められるものうち、女性の髪については、奄美・沖縄を中心とする南西諸島においては、特に船主の姉妹の毛髪を納める例が数多く見られる。

南西諸島には、姉や妹が兄や弟の守護神となるといったオナリ神信仰が広汎に見られるが、船霊として姉妹の毛髪を納めるのもこうした信仰に基づく習俗といえる。また、男子が島を離れる際に、姉妹の項の髪を毛を乞うて守り袋に入れたり、姉妹の手拭を貰って旅立ったりする風習もかつてあったが、これらも姉妹が旅や航海をする兄弟の安全を守るオナリ神となるといった信仰に基づく習俗である⁽¹⁾。

八重山においては⁽²⁾、航海に先立って、風旗の前でのツカサと姉妹や親戚の女性たちによる祈願や、浜での船頭による船霊への祈願が、さらに出発に際しては、美崎御嶽で大阿母^{おあも}（ツカサを統率する上位の神女）らの祈願が行われ、船頭らはその祈りのこもった火の神の香炉の灰を白紙に包んで守りとして懷中にしまったといい、一方、ツカサや姉妹は、三日三晩の御嶽での夜籠りをして、線香を焚き通して祈り続けたという。また、航海人のある家には風旗を立て、高い木の上や竿の先に板で作った舟や魚の模型を吊るすなどの光景も近年まで見られたという。

しかしながら、多くの地域においてはこうした古い習俗や信仰

は、早くに忘れられつつあった。明治後期に奄美大和村の旧家に生れ（二九〇二年（明治三五）生）、近代化されつつある奄美において伝統の習俗について深い関心を寄せて、柳田国男に学んで多くの著述を行い、平成年（一九八八年（平成八）永眠）まで活躍した長田須磨は、船頭の室に姉妹^{フナリ}の髪が掛けられているのを知った際のその驚きを、哀しくも不思議な伝説とともに次のように記している⁽³⁾。

船霊様

船神はフナリ神（姉妹）にましますので、船頭室には姉妹の霊として、フナリの頭髪を貰いうけて飾ってある。

この風習を歌に託したのに次のようなのである。

船の外ともに、ヨイソラ、（囃）（くり返す）

白鳥が、とまっている、ヨイソラ

白鳥では、あらぬ、ヨイソラ

私のオナリ神ガナシ、ソラヨイ、ソラヨイ

昔話にオナリが機織の手を休めて昼寝をしていたという。母親が、それをゆり動かしたら、娘は「あらお母さん、今、兄さんが海に溺れて救う時、その手を放した」「あ、兄さん」はと泣いた。その時、この兄は手を放されて溺死した。

フナリはエヘリを守る魂の地位にあると奄美は信じている。

船霊様にフナリ神の頭髪を飾ってあるのには実に吃驚した。（以下略）

「舟の高艫節」「舟の外艫節」「ヨイソラ節」の名で知られる、これと同様の歌は琉球歌謡にも見られる。海を飛ぶ白鳥を航海を守護するオナリ神とする信仰は、広く琉球文化圏に見られるが⁽⁴⁾、こうした、航海を守護する海鳥の信仰に基づいて、新たに復興された祭祀があることも注目

される。

奄美大島、龍郷の神社、安木場あんきやばの今井権現で旧暦九月に行われる例祭であるが、現在の祭儀は、この地出身であり、現在この社の祭祀を司るユタ阿世知照信氏によって復興されたものである。

その例祭は、社に祭神として祀られる白鳥に深く関わるもので、その由来について阿世知照信氏は以下のように伝えている（阿世知氏記資料に基づく）。

宝永年間（一七〇〇年頃）に、薩摩（鹿児島県）山川港より奄美に向けて出港した一隻の船が、暴風雨に見舞われ、ついには呑み込まれようとした。と、そのとき、二羽の白鳥が飛んできて、船の外艦そとぶね（和船の船尾の突出部分）にとまると、荒れる波間より船が再び浮かび上がった。船員たちは白鳥を見て、神の助けを感じ、勇気を出して船を走らせ、辿りついたのが龍郷湾は今井権現を見上げる今井崎であった。苦難をともにした二羽の白鳥は、風雨が静まり、波も穏やかになったのを確かめると、安木場あんきやば（集落）の立神（海より突き出した岩礁）を廻り、神社の方向へ飛び去っていった。その後これを聞いた代官が、二羽の木彫の白鳥を作らせ、これに龍宮の海女神を宿らせて航海安全を祈願する御神体として、神社に祀ったのである。

現在、阿世知氏により、旧暦九月九日朝の満潮時に行われる例祭は、陰月大神でもあるこの龍宮の女神と、男性の太陽大神との再会を実現させるための儀礼といい、十人を超える子神様コガミサマ（ユタの人々）とともに行われる。早朝、今井権現下の美しい浜辺の大岩の上に上がり、各人、木彫の白鳥とダンゴ、線香を供える。そして、親神の阿世知氏に従って、ともにススキの穂を振り太鼓を鳴らし、龍宮女神を招いて、航海安全の

ほか大漁祈願、疫病除去等の多くの祈願を行う。岩より降り、海に膝まで入って、沖に向かって同様に祈願を行った後、急勾配の石段を登り、山の上の神社のさらにその上、頂上まで上がって、祭壇を組み、白鳥を飾り供物を供えて、阿世知氏が祈願を行い、その前で次々と子神様コガミサマが踊り、さらに神社に入って同様の祈願を行う。そうして正午ごろ、奄美の多くの祝宴、島遊びと同様、神社の前庭にてユタの人々と参拝に訪れた安木場の氏子の人々らがともに六調を踊って終了となる。

親神阿世知氏の木彫の白鳥は、氏が諸祭祀や病者の治療祈禱を行う祭壇にも祭られている。阿世知氏の祭壇組やその飾りは、氏がユタとして成巫した際に啓示を受けて作ったものというが、この白鳥が宿すという龍宮女神に、航海を守護するオナリ神としての性格を認めることもできる。

民俗的な信仰が趨勢としては衰退しつつある中で、都市において誕生し続けるユタとともに、新たな航海祈願の信仰を背景とする新たな祭儀を生成する力を今なお有しているものというが、本稿では琉球地域の伝統的な木造船（刳り船・サバニ・板付け船、等）への信仰や祭儀について、用材となる樹木との関わりに注目して、考察したい。

① 船大工と船霊・木霊の祭祀と呪法

船に祀られる船霊は、木造船が完成して、進水式を行う際にこれを籠める作法が行われる。

奄美において伝統の造船の技術を伝える坪山豊氏の場合、女性の髪の毛・米・結んだ昆布等、七つの品を埋め込み納めて、呪言を唱えるというが、次の唱え言は二〇〇三年（平成十五）に、造船の完成に際して船霊を籠めるために実際に使われたもので、ニライカナイの龍宮女神に航海の安全などが祈願されている。

船魂込めて航海安全大漁願ひ

ナナツネ

七峰七谷の神様

アミテイル

願ひ立てい、

天太陽と雨や朝夕冠てい、

山神様ぬ木ぬ延び栄え美

らさ、年月日ぬ廻れば船ば造れん大木を受賜らてい、

墨差・墨壺・

鉦丈尺当てい難じやる木や、脇き美らさ造やる船や、

棚内美さ海

原に浮べて浮き美さ走れる船や、

一ツぬ波越えて七ツぬ波越えて、

三岬廻てい島々廻れば、

船魂込てい、

龍宮カナヤ海女神ば祭り込め

て、朝夕、月夜・闇夜・満月・朔日潮ぬ満引節の廻りそ、

火災・地震・雷・暴風・龍巻神、

イカ・鯨や除られて出船入船安全航海大漁

謹んでお祈りお願い申し上げます

この文言は、実は坪山氏が親交のあるユタ神阿世知氏に依頼して作ってもらったものであるが、注目されるのは、山の神に対する感謝が捧げられている点である。

奄美においては、棟上等、家の普請の場合、樹木とその山の神の祭祀が行われた。⁽⁵⁾この、木造船の造船過程においても、船材とする樹木を山の神の許しを得て貰い受けたものであるといった認識が忘れられることなく、樹木やその山の神に対する祭祀が必要とされたのである。

船霊に対する祭祀が、海と山の両方の神霊に関わる祭儀として行われているわけであるが、山の神との関連ではまた、墨差・墨壺・曲尺といった道具が読み込まれている点も看過できない。

いうまでもなく、山中で木を伐り、船材とするための道具であるが、興味深いのは単に伐採に使用するのみならず、伐木の際にはこれらの道具によって、木や山の神霊に働きかける作法があったことである。

昭和五年（一九三〇）、宇検村出身の坪山氏は二十歳のとき大和村大金久の船大工を師匠として弟子入りし修業した。現在では、奄美の山中において船材とするための伐木を行った最後の一人となったが、そのお

およそは以下のものであった。

入ったのは、名音・戸円・大和浜・大金久・湯湾釜・志戸勘の六つの集落の山で、一年の中、十一月から二月（旧暦）の約四カ月間、師匠の息子でもあった兄弟子と二人で川の近くに作った山小屋において自炊して寝泊りし、山中に分け入って伐木を行い、鋸で挽いて板材とし、その年一年分の用材の準備をした。

山中は涼しく、仕事は苦しかったり辛かったりすることもなく、おもしろいようにはかどったし、夜は虫の声を聞くのがなにより楽しみで、退屈することはなかった。冬季なので、ハブの心配もなかったが、それよりも恐ろしかったのはケンムンであった……、という。

こうした山からの船材調達の仕事において注目されるのは、伐木の際の作法で、師匠からの教えと、実践、体験について次のように語っている。

丁稚奉公時代、師匠からは、山で木を伐るときには必ず、斧を両方から伐る真似をして叩くように、といわれました。斧には切れ目が、左面に三つ、右面に四つあるが、これは魔除けとして付けられているものなんです。

木を倒す前に、魔除けのために木の前で斧を三振りすると、木が風もないのに揺れたり、動きだす場合があるのですが、このような木は伐ってはなりません。「山の神木」であるから、伐ってはならないんですが、民謡にもそのことはうたわれています。

木を伐ろうとしたところ、木が怒ったということも実際に経験しています。山の神、あるいはこの木を住みかとするケンムンが怒っているのかもしれない。しかしながら、何も異変が起こらない木は、伐つてもよい、「やさしい木」なんです。

ケンムンとは、奄美において信仰された、山でガジュマルやアコウの老木等に棲むとされる精霊で、沖縄のキジムナーに相当する神霊である。山ばかりでなく街中においても、ケンムンと遭遇して恐ろしい思いをしたという証言は、奄美では、現在でもここで生まれ育った六十代以上の人々から数多く聞くことができる。その姿は、伝える人によりさまざまであるが、子供ほどの身長で、顔は猫、あるいは犬、猿、カッパに似て、赤い毛で全身が覆われる姿は猿のようだ、等といった話がよく聞かれ、リアルな実感を持つて信じられていたことが知られる。坪山氏の伝える伐木の作法も、単なるお呪い、慣習的なものという以上に、ケンムンに対する真剣な対処法だったのである。

ちなみに、ユタとして地鎮祭等も行う阿世知氏も、これとほぼ同様の伐木の作法を伝えている。

木を伐るときには、まず墨差・墨壺・番匠曲（＝曲尺）（＝曲尺）を幹の下に供えます。そうして、番匠曲は地面と樹木に直角に合わせて置き、はじくんです。そうすると「ボボボボボボ」というなることがあります。斧を振り上げて、片側に三回、反対の側を二回、叩くような所作をします。この回数は、斧に刻まれた目の数です。

奄美においては、家を建てる際の棟上や、正月に大工神を祀るセークユエ（＝祝）等、墨差・墨壺・曲尺が飾り供えられる大工の行事がある。これらにも用材とするための山の樹木に対する祭祀としての性格が見られるのであるが、両者ともに、斧や曲尺が、樹木の神霊や山の神と交感するための祭具として使われており注目される。

② 職道具による呪詛

船大工坪山氏の、船材とするための樹木の伐木の作法について見てきたが、職道具に関する説明において看過できないのは、斧に刻まれた片側に三つ、もう一つの片側に四つ、計七つの目が魔除けであると語っている点である。

奄美における民間で伝えられる呪いのための唱え言を「タブエ」「タブ」「口タブ」等というが、その中に夜道を歩く際、ケンムンを除けるために使われるタブに次のようなものがある。⁽⁶⁾

ななつぬ むいぬ いっちゅん かたなわんや むっちゅつと

「七つの目の入った刀を私は持っているぞ」といった意味であるが、七つ目の刻まれた刃物の呪力が、これを使用する大工や木こり等、職能者のみならず、民間にも信仰されていた民俗的な知であったことが確認できるのである。ちなみに、七つ目（あるいは八つ目）の斧の呪術的な使用については、いざなぎ流を伝える高知県物部地域においても見られることを確認しており、さらに全国に渡る関係事例の調査が必要であろう。樹木に関わる職の道具が、樹木や山の神霊に働きかける祭具としても用いられていたわけであるが、さらに興味深いのは、これらの道具が、人を呪詛する呪具としても使われることがあったことである。

造船を注文した依頼者を船主というが、完成後、なかなか支払いをしてくれないなど、船大工を怒らせるようなことがあった場合、船大工は船主の前で曲尺を折る、といった行為を行うことがあった、という。これは、船霊による呪詛で、場合によっては死に至るような災難に遭うものと船主は恐れたもので、また、このようにされた場合には、ご馳走

等、お詫びの印を持参して船大工に謝らなくてはならないものとされていた、という。

坪山氏が船大工仲間より聞いた話として語ってくれたのは、ときには船霊を収める場所に故意に鑿^{のみ}を置き忘れておくようなことをすることがあった、という話である。船が遭難して沈没させるようにするための呪詛であったというが、船霊にはたらしかけることによる呪術といえよう。

こうした職道具による呪詛は、実は家を建てる大工も行っていた。現在、大島内外の人々の相談に応じ、地鎮祭等も行う佐仁出身、在住のユタ栄サダエ氏は、次のように語っている。

棟梁というのは、大工の神の使いをさせられているものです。大工は神経を集中させて、一ミリの狂いもないようにして家を建てるんですね。大工道具を家に入れるときも慎重にする。それを軽々しく思ったのでは、いろいろと不都合が生じるんです。ある家は、玄関でトントン、トントン音がして、寝かせてもらえないようなことがあったりもしました。また、屋根裏に弓とバンジョウガネ、墨壺を置かれた家もありました。棟梁さんが、腹を立ててわざと置いたんですね。弓というのは、棟上式の時に飾る弓ですが、それをわざと天井を張ったその裏に置くわけです。子孫が根こそぎ残らないようにさせられるということです。

いずれにしても、職道具により職に関わる祭神を発動させることによってなされた呪詛であるが、道具に対する畏怖の念は平生よりあり、その扱いは慎重を期した。

坪山氏は、大工道具を盗んだりするのは、大工の経験や刃物を扱った経験のない素人や一般人であり、大工等であれば、その恐ろしさより盗

むようなことは絶対にしない、というが、こうした認識はかなりの程度、一般にも共有されていたようである。徳之島出身の三上絢子氏は、幼いころ、母より、大工の家に遊びに行ったときには、大工道具をまたいだりしないよう、きつくいわれたといい、次のように語っている。

大工はノロやユタ神よりある意味では怖かった。ノロ・ユタは人を呪い殺したりすることはないが、大工は、怒らせたりすると恐ろしいことになる、と信じられていました。ケンムンと同じように恐れられていたのです。

三上氏は、「屋普請の場での棟梁は威厳があったが、単なる畏敬ではない、畏怖の対象でもあった」とも語っている。前近代的な職能者は、技術の specialist であると同時に、職に関わる自然の神霊を祭祀して呪術を行う shaman でもあったのである。

③ 船とオナリ神と樹霊

では、船をめぐるこの二つの信仰、船材と関係の深い山の神の信仰と航海を守護するオナリ神信仰との関係をどのように考えたらよいのだろうか。

本土においては、たとえば、伊豆半島沿岸における新造船の船下しの際の山の神下しのように、木霊を船より落とすための儀礼であると見做される例があり、樹木に籠っている霊を船材より分離させることによって始めて「船」として完成する、といった考え方を見ることができ⁽⁸⁾る。

一方、南西諸島においては、船や航海に関連して、樹木の霊に対する信仰とオナリ神の信仰とは深い結びつきがあったようである。

船材となる樹木とオナリ神との関係を考える上で、沖縄本島よりさらに南方の離島、八重山地方、石垣島宮良村に伝承される歌謡「池ぬぶしいジラバ」にまず注目したい。⁽⁹⁾

ヌズケーマと呼ばれる美女を主人公として、以下のような内容が歌われる。

——ヌズケーマは役人の恋慕から逃れるために家を出、オモト山を三ヶ月もの間、彷徨った。その末に、山から戻る途中に力尽き、池の端で死んでしまう。するとその遺体からは、榎木とタブの木が生え出るが、その榎木とタブの木の両方が伐られて船材とされ、立派な船が作られる。その船に乗ったのは、何と彼女に恋慕した役人であった。——

ヌズケーマが山中の池の端にて力尽きたくどりより、詞章を見てみたい。

池ぬ側に	うすびょうり	(池の端に、伏せて死んでしまった)
片乳から	榎木	(彼女の遺体の片乳から榎木が生えた)
片目から	とうむぬ木	(片目からはタブの木が生えた)
榎木や	たな取り	(榎木は、船材用として伐られ)
とうむぬ木や	どう取り	(タブの木も、船材用として伐られた)
棚取りぬ	かいしゃぬ	(船材用の榎木の、見事さよ)
どう取りぬ	ちゅらさんどう	(船材用として、実に美しい)
とうむぬ木や	どうびぜー	(タブの木は、船の竜骨として使われた)
榎木や	棚うけ	(榎木は、船板に使用された)
ゆぬ親に	乗らりてい	(船として彼女は同じ役人に、乗られた)
ゆぬ主に	乗らりてい	(同じ村の役人様に、乗られてしまった)
船なにでん	ゆぬ乗りでん	(船になってまで、乗られる運命だった)
命は肌だに	乗らしらば	(生前、乗せても同じなのに)

(喜舎場永珣『八重山古謡』上)

この物語に類する歌謡は八重山・宮古諸島に伝承されているが、砂川哲雄氏は、主人公の女性を共同体の祈願を行う巫女・祝女(ノロ)の成巫過程が反映されたものと考え、俗の空間より聖なる空間へ分離されるための山籠りが物語に反映されており、その死より再生への契機として川、池等の水辺——というより水そのもの——が、重要な役割を果たしている、との興味深い分析を行っている。⁽¹⁰⁾

本歌の類歌の一つに、宮古諸島の池間島に伝承される「真白美」^{マッサビ}なる名の女性を主人公とする歌謡があるが(「マッサビがアヤゴ」、宮古本島には、このマッサビを妹神として荒ぶる神の兄神とともに祀る御嶽^{ウタキ}がある。中央東岸に臨むビッシ御嶽(広瀬または別瀬御嶽)がこれで、両者は航海安全の神として信仰されている。十八世紀のはじめ頃に編纂された『宮古島御嶽由来記』には、広瀬御嶽について、「祭神は女神真しらべ、と唱へ船路守護の神として崇敬す」(傍点松尾)と見え、マッサビに対する信仰の古さが確認できる。⁽¹¹⁾

宮古島には、現在でも、航海安全を祈願する神女による行事を見ることが出来る。その一つに、新里の「ナガイムトゥ」御嶽における旧暦十一月、ツカサによって行われる「シツマス」があるが、この御嶽では次のような一節を含む歌が歌われる。⁽¹²⁾

ナガイの浜に 神の船みちみち 布は船いっばいに あふれるばかり
かの下の島 八重山島に 納付場があるから 立派に清らに 納め
てくれ⁽¹³⁾

この祭祀は、通常冬至の数日前に終わるが、かつてはその後の数日間、神が船上布を積み込んで南を目指して船出する故に、御嶽周辺、及び、その近くの浜には近寄ってはならないものとされていたという。

ところで、女神「まっさび」についてであるが、その意は通常、「色

白の美人」と解されるが、狩俣恵一は、「真の神に申し上げる人たち」の意であり、神女のことを指すものではないか、との興味深い考証をしている。⁽¹⁴⁾

このように見てくると、歌謡として歌われる「池ぬぶしいジラバ」の物語は、支配者の横暴を恨む女性の悲劇なのであるが、信仰としては、航海を守護するオナリ神そのものが船材となり船となって、乗員を守るといった考え方を認めることができる。

ここでさらに、船と関わるこのオナリ神の信仰を考える上で見過ごせないのは、琉球王国時代には、航海安全の祈願をするために公用船には神女が同乗していたと考えられていることである。⁽¹⁵⁾

八重山諸島黒島に伝承される、「マブナリ」——真の姉妹の意——という名の女性を主人公とする歌謡「ナカヤマジラバ」の概要は次のようであるが、こうした習俗を背景に作られた歌であると考えられている。

マブナリは、代々、公用船の船子を務める仲山家に生れたが、女性の上、幼いゆえ、航海は無理と思われた。しかしながら、占者の占に従って琉球本島に向けて同船することとなった。公用船は途中、嵐に遭ったものの、「船かいさまぶなじ、道かいさまやらび」——、まぶなりのおかげで平安な航海ができたのであった。

竹富島には、年貢上納のための航海をしたマールン船に航海安全の祈願のために神女が同船していたとの伝承もあり、こうした事例より、この「ナカヤマジラバ」のマブナリも、航海の安全を祈願する役割を荷わされた神女であつたろうと推測されている。⁽¹⁶⁾

さて、船となったヌズケーマに乗ったのは村の役人であるし、宮古島新里のシツマスは、宮古上布の交易を確かなものとするための公的な祈願であつた。また、八重山の歌謡「ナカヤマジラバ」においてマブナリ

の乗ったのは公用船であつた…、というように、いずれも公的な航海に関わつた神女——、オナリ神の性格をも有する神女についての歌謡や物語が生み出されていったことが知られよう。

さて、ふたたび樹木や樹霊と女性神との結びつきであるが、(造船ではないが)奄美における以下のような、高倉の建造における興味深い例をあげたい。

名瀬市仲勝^{なかがち}において、豊年祭等、集落の祭祀を行うノロを補佐するグジュシュ上田秋則氏(一九三一年(昭和六)生)が伝承する例で、高倉を建てる際に、少女の髪の毛を柱の下に埋めることがあつたと述べている(以下二〇〇七年三月、松尾の調査に基づく)。

高倉は、米をはじめとする穀物の貯蔵のために主に使われる倉庫で、太い四本柱に萱葺の三角屋根が印象的な、奄美の伝統的な建築としてよく知られている。上田氏によれば、その用材とするための木を伐る際には曲尺・墨壺・墨差しを木の前に置いて、木に対して断りをしてから行つたというが、特に六本柱、八本柱の巨大な高倉を建てる場合には、十三歳未満の女子の髪の毛を、柱の一本(最初に立てる東側の柱)の礎石の下に埋めたという。

この場合、木を伐る日にちは、この女子の生まれ年の干支によって決定する故、木を伐る以前に髪の毛をもらう女子を探しておく必要があつたともいう。十三歳未満の女子というのは、初潮前の(信仰上)神聖な女性であることが求められたものといえるが、これも伐木における樹木の霊の鎮魂のために、聖なる女性の力が必要とされた例と認めることができる。

造船、建築といった目的の差を越えて、伐木においては、樹木の霊の鎮魂のために神女の力が必要とされたことを認めることができる。

④航海と女神、船体と樹霊——琉球・中国の民俗比較に向けて——

船に関わって、航海安全を女神に祈願したり、船材となる樹木に対する儀礼が行われたりする例は、沖縄地域を超えて大陸や、琉球弧の南端、与那国より続く台湾にも見ることができ。私が、実見した例を中心に、今後のより広い、東アジア・東南アジア的な視点からの民俗比較へと進むための予備的考察を試みてみたい。

台湾における端午の龍舟競渡のひとつ、台南運河のそれは、一七六四年（清朝乾隆二十九年）にはじめられた、台湾の龍舟競渡の発祥となった行事であるが（連横『台南古蹟志』）、強い媽祖信仰のもとに行われている（松尾の調査は二〇一〇年）。龍舟競渡の行われる運河の脇には競渡に先立って媽祖が勧請されて、祭壇が設けられ、祭祀が行われるのである。この媽祖は、平生はこの祭壇が立てられる運河のやや離れた地に建つ、大天后宮に祀られる祭神であ



運河の脇に大天后宮より勧請された媽祖の祭壇（撮影：松尾 2010年6月）



台南運河の龍舟競渡（撮影：松尾 2010年6月）

る。媽祖は、航海安全を守護する女神として、中国福建を起点として十一〜十三世紀に中国南部より東南アジアにまでその信仰圏が拡大するが、十七世紀に開かれたこの台南の大天后宮は、媽祖を祀る台湾における最古の媽祖廟である。

この台南運河の龍舟競渡では、航海安全を祈願する媽祖の祭祀のほかに河や水神、また船に対する祭祀が行われる点も看過できない。競渡の前には「水神」を勧請し、河を祭り感謝する儀式（「祭江」）、龍舟に関する儀礼として、これを河に迎え、龍（舟）の開眼を行う儀式（「接龍船」「開光點睛」）が行われるのである。

龍舟（龍船）といった船を使用する行事なので、水神としての龍に関わる儀礼のみならず、船体に対する儀礼が行われることも自然であるが、台湾においては端午の行事以外に、より強く船体へはたらきかける民俗・宗教行事を見ることができ。

福建地方より伝えられたという、台南県西港郷の慶安宮が、曾文溪流域にて行う王船祭がこれで、「王爺」を祀り、病氣治癒・航海安全・豊漁祈願などを祈願する行事として行われている。大陸では「王爺」は、疫神（瘟神）を司る神として信仰され、王船祭は、元来は疫神を異界へと送る行事だといひ、海辺



西港焼王船

<http://tour.tnc.gov.tw/jp/festival/index-1.php?m=99&m1=17&m2=57&id=2>

にて王船を焼き、天河へと送り遊ばせる作法（「遊天河」）が重要な儀礼となる。本行事についての信仰的側面は、劉枝萬はじめいくつかの論考があるが、ここでは、船体に関わる諸行事に注目したい。

王船は、最終的には燃やされてしまうので、行事の度に造られることとなるが、童乩による、船体の背骨ともいべき龍骨にするための樹木の選定や、龍骨の製作を信仰の上で重視すること、船の前方の両側面に嵌め込まれる眼―この目は「龍眼」と称されており、船体を龍と認識しているようである―の開眼の儀礼（「坎巾及龍目」）、進水式としての碇を下す儀礼（「下碇暫泊」）、等、実際の木造船の造船から進水までの過程における祭儀に準じる諸作法が行われる。

船は、行事の度に新造されるので、造船の儀礼があわせ行われることは自然なことであるが、これらの儀礼に王爺や瘟神をはじめとする、諸神霊に関わる作法が有機的に組み込まれて、数か月にわたる儀礼の全体が組み立てられているのである。

一方、沖縄であるが、（造船においてはなく）船漕ぎが行われる年中行事において、これとの比較において興味深い例を八重山に見ることができる。西表島祖納で行われる龍船（いわゆるハーリー（爬龍）船であるが、西表ではかつては「パリャブニ」と発音された）競争で、旧暦九月に年替わりの祭りとして行われる節祭（しち）における、船漕ぎ競争の船に関わる作法である。

船漕ぎの行われる節祭当日（元日を意味する「正日」）の前日には、船が浜に出されて、船体に対する祭祀が行われる。船に供物がささげられ、船体に対する浄め、航海（船漕ぎ競争）安全の祈願が行われるが、これに先立って目が鮮やかに描きなおされる。祖納・千立のハーリー船は、現在は専用の公民館（集落）所有のサバニが用いられるが、戦後間もなくまでは、主に漁撈等に使用した個人所有の削り船を使い、当日に現在と同様の文様をチョークで描いたという。船に目を描くのは、行事

に使用する龍船とするための開眼の作法とみることができよう。

船漕ぎ競争の行われる当日は、ミリク（弥勒）が着し、龍船によってニライカナイより、豊穡が約束された新たな年々、世界報が迎えられた船元（フナト）（＝浜の舞台）にて、ミリクに捧げるためのさまざまな歌舞・滑稽芸・獅子等が演じられるが、そのなかで女性によるアンガー踊り（「アンガー」は若い女性を意味する）の一つ「船」では、次のような船の各部分をほめ讃える歌が歌われる。

- 一、船 ヒヤイ 檣ヌ木ドウスリ 船デゴザル
サーニーサーヌーイーヒーヨイ
- 二、柱 ヒヤイ シンギ松柱デゴザル
- 三、滑車 ヒヤイ クバナ木ドウスリ 滑車デゴザル
- 四、美縄 ヒヤイ 麻ヌ草ドウスリ 美縄デゴザル
- 五、矢帆 ヒヤイ サラスビイドウスリ 矢帆デゴザル
- 六、鳥 ヒヤイ 歌イドモスリ 夜夜中
- 七、船 ヒヤイ 出ダシヨラバスリ 夜出ダシミシヨリ

檣の木を船材とする船体、松の柱、クバの木の滑車、麻の縄…、等が歌いこまれ、船の堅牢さと美しさが讃えられている。

注意されるのは、滑車や帆柱・帆が読み込まれていることで、すなわち、動力（エンジン）が装着されるようになって、現在はほとんど見ることでできなくなった、かつての帆をかけた、漁撈のためのサバニをほめ讃えたのがこの歌なのであり、この歌に限っていえば龍船であることは、それほど重視されていないものといえる。

先（前節）に見たように、八重山には石垣島宮良の歌謡「池ぬぶしいジラバ」のように、檣木・タブの木等を船材とする船の立派さ、美しさをうたった歌謡が伝承されている。



台湾タオ族のタタラ

日本沖縄海洋文化館蔵

(<http://oki-park.jp/kaiyo/jp/explore/tatara-ship.html>)

また、奄美大島の、木造船が完成した際の進水式における、船大工による船へ船霊をこめる唱え言の中に、山に分け入って伐った巨木によって造った美しい船であることを内容とする言葉を見ることが出来る例も先に見たところである（第一節）。

こうした例をあわせ考えれば、西表島祖納の、龍船に対する祈願や、船体そのものに関わる歌謡が歌われたりする節祭は、台湾の王船祭と共通する要素、広義の儀礼作法を含む、民俗宗教的な行事であると認めることができる。

ところで、中国の龍舟・龍船の建造においても、山における樹木の伐りだしを重要な作法とする例を見ることが出来る。やはり端午の行事として行われる龍舟競渡のひとつ、貴州省の苗族の例である。

龍舟とするのは、刳り舟の系統に位置づけられる船体であるが、そのための樹木の伐採は、船漕ぎのリーダーや船大工によって儀礼的に行われ、

また、巫師が經典を読んで、樹木が龍になることを祈ったりする⁽²²⁾。

山での樹木の伐採の際の祈願は、木の本来の線香を立て、魚を供え、儀礼的な伐採は（鋸ではなく）斧を用いる定めとされ、こうした作法は、造船だけでなく、家の建築のための用材とする伐木の際にも行われるという。こうした例は、八重

山地域により近い台湾の少数民族にもみられる。台湾台東蘭嶼郷の蘭嶼に住むタオ族（別名ヤミ族）の、（刳り船（独木舟）ではなく）板付け船で、「チヌリ克蘭」（タオ語 Chinurikuran）（中国語「拼板舟」）ピンバンジョウ・pinbanzhou）と呼ばれる船である。海に出てトビウオ・シイラなどの漁を行うために木造船で、進水式等、儀礼に用いるものは全長7メートル程度十人乗りの船であるが、日常の漁撈に用いる3メートル程度で二〜三人乗りのものは「タタラ（Tatara）」と呼ばれる。約二十枚のリュウガン（龍眼）やパンノキ（パンの木、学名：Artocarpus litsea）の材木を組み合わせて作る、龍骨を持つ板付け船で、クワなどの木釘で船体の各部をつないで固定するが、山に入って用材とする樹木を伐る際には、その樹木の「樹霊」に断りをする祈願の儀礼を行う⁽²³⁾。

*

*

*

端午の行事としての龍船競争といった、「琉球—中国」の国家間の交流を通じての伝来が明らかで本島より八重山地域まで広くに分布するが、豊年祭や節祭など、稲作と関わる行事における船漕ぎ競争、八重山における船体を讃える歌謡など、地域的な展開を遂げて現在に続いている。

琉球地域の航海安全祈願の女神や船霊信仰の起源を媽祖神に求める研究も存するが、船体や龍船に関わる儀礼や信仰に限って言えば、そうした外来神の影響よりもヲナリ神として顕著に現れる女性神に対する信仰を重視すべきではないだろうか。

貴州省苗族、台湾タオ族など、山中での伐木より造船の開始を認識し、樹霊に対する断りを行い、特に苗族の神木の伐木では斧を使うことが慣例とされることなど、奄美大島の伝統的な造船儀礼との類似例を見たが、これらについては何らかの影響関係を想定するよりは、自然環境との関わりの中での生活・生業や、そこでの信仰などとの相関関係を明らかにして相互に比較してゆくことが求められよう。

本小論の結びとして、琉球文化圏における船をめぐる女神や樹霊の問題について、琉球時代からの交易・交流のあった大陸や、琉球弧の南に続く台湾の民俗との比較の可能性や視座について考えたが、今後、さらに事例を積み重ねて本課題について考察を続けたい。

註

- (1) 伊波普猷「をなり神」(『沖縄文化論叢』第2巻(民俗編1)、平凡社、一九七一年、初出は『民族』二巻二号、一九二七年(昭和二)、馬淵東一「沖縄先島のオナリ神(一)(二)」(『日本民俗学』二巻四号、一九五五年、三巻一号、一九五六年)等、参照。
- (2) 以下、八重山における航海安全祈願の習俗については、新城敏男「航海への祈り―一尋の手巾―」(中田龍介編『八重山歴史読本』(南山舎、二〇〇四年)所収)参照。
- (3) 奄美大和村所蔵、長田須磨資料に基づく。
- (4) 前掲註1伊波「をなり神」参照。
- (5) 拙論「奄美の建築儀礼と山の神信仰」(『儀礼文化』37号、二〇〇六年三月)参照。
- (6) 田畑千秋「ケンムンの諸相―ケンムンの始まり―」(『國學院雑誌』九十九巻十一号、一九九八年(平成十)十一月)参照。
- (7) 拙著『物部の民俗といざなぎ流』(吉川弘文館、二〇一一年)、第一章「物部の職能民といざなぎ流」参照。
- (8) 神野善治「木霊論―家・船・橋の民俗」(白水社、二〇〇〇年)、第二章、船霊・山神・木霊、一「山の神おろし」。
- (9) 以下、歌謡「池ぬぶしいジラバ」については、狩俣恵一「南島歌謡の研究」(瑞木書房、一九九九年)、第四章、南島の物語歌謡、第二節「物語り歌謡の諸相」3神女の物語歌謡、参照。
- (10) 砂川哲雄「南島歌謡における祝女の山ごもりと造船」(八重山文化研究会編『八重山文化論集』、八重山文化研究会、一九七六年十二月)。
- (11) 馬淵東一「沖縄先島のオナリ神(一)(二)」(『日本民俗学』2巻4号、一九五五年、3巻1号、一九五六年)参照。
- (12) 二〇〇七年に仲里千代子さんの新里調査に同行させていただいた松尾の調査、及び、『上野村の御嶽(伝承と祭祀)』(上野村教育委員会、二〇〇〇年)「新里、ナガイムトゥ」参照。
- (13) 前掲註10佐渡山「上野村の御嶽」「新里、ナガイムトゥ」参照。
- (14) 狩俣前掲註7「南島歌謡の研究」、第四章、第二節、3神女の物語歌謡、参照。
- (15) 狩俣前掲註7「南島歌謡の研究」、第四章、第二節。
- (16) 狩俣前掲註7「南島歌謡の研究」同章節、4マブナリの物語歌謡、参照。
- (17) なお西田テル子は、グジヌシュ上田秋則氏のノロ祭祀における役割、ライフヒストリー等を含む論考「名瀬市仲勝集落のノロ祭祀」(『奄美沖縄民間文学』5号、二〇〇五年九月)を発表している。
- (18) 以下、王船祭については、劉還月、協和台湾叢刊44「台湾民間信仰小百科(醮事卷)」輯四「送王船大典」(臺原出版 一九九四年、台北市、参照)。
- (19) 劉枝萬「中国道教の祭り信仰」(桜楓社、一九八四年)、等。
- (20) なお、琉球文化圏のハーリー船競争は、琉球時代に中国の端午の行事として行われていた(現在も、中国全域の川や湖において盛んである)、龍船競争を起源とし、那覇を中心とする沖縄本島では、「ユッカヌヒー(四日の日)」の行事として、(旧暦)五月四日に行われる例が多い。しかしながら、本島の行事が伝播したとみなされる宮古・八重山地域では、稲作と深くかわった豊年祭や節祭のなかで、龍船競争が行われる例が多くみられる。松尾「西表島の稲作儀礼と龍船競争―沖縄・中国の比較民俗に向けて―」人間文化研究機構シンポジウム「アジアから琉球弧を考える―海洋をめぐる人・モノ、文化」二〇一一年十月、参照。
- (21) 沖縄地域の龍船は、志賀大学蔵「那覇港屏風」に描かれるように、中国より伝来した当初は、龍頭がつけられていたものとみられる。しかしながら、現在の沖縄本島・八重山地域のハーリー船の多くは、龍頭はつけられず(那覇ハーリー・豊見城ハーリーのように龍頭がつけられた船が用いられる例も存する)、かつて漁のほか荷物運搬等に使用された「サバニ」と呼ばれる流線形の船が用いられ、特にハーリー船には前方両側に目が描かれる例が多い。
- (22) 中国民俗学会組織編「賽龍舟」(二〇一〇年)参照。なお、松尾は二〇一一年六月の貴州省台江県清水江での苗族の龍舟競渡のうちに、旧州村にて本作法について聞き取り調査を行った。
- (23) 王煒昶「台湾原住民祭典的盛會」(達悟(雅美)族)と拼板船航行何處? 十人新船下水祭的文化觀察」南天書局有限公司、二〇〇四年、台北市、国立台湾史前文化博物館「造大船記錄片」二〇〇六年。
- (24) 拙論「西表島の稲作儀礼と龍船競争―沖縄・中国の比較民俗に向けて―」(人間文化研究機構シンポジウム「アジアから琉球弧を考える―海洋をめぐる人・モノ、文化―」人間文化研究機構、二〇一一年九月)、「日本沖縄南方島嶼(八重山地区・西表島)の種稲儀式と賽龍舟・沖縄・中国的比較民俗」(王媛訳、中国・中山大学非物質文化遺産研究中心「文化遺産」二〇一二年一月)参照。
- (25) 近年の媽祖信仰についての詳細な研究に、高橋誠一「日本における天妃信仰

の展開とその歴史地理学的側面」(『東アジア文化交渉研究』二号、二〇〇九年)がある。藤田明良の論考「日本近世における古媽祖像と船玉神の信仰」(中央研究院人社中心亞太區域研究專題中心編『近現代日本社會的蛻變國際研討會論文集』所収、中央研究院人社中心亞太區域研究專題中心、二〇〇六年十二月)が参照され、中国起源の女神媽祖が、新たな船霊神として各地に受容されていたものの、江戸時代末期にはそうした信仰は次第に姿を消していったとする論旨が肯定的に紹介されている。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(二〇一一年七月一四日受付、二〇一一年一月二一日審査終了)

Ships and Tree Spirit Belief in the Ryukyu Islands Arc

MATSUO Koichi

In traditional wooden ships, a divine spirit generally called “funadama” is worshipped to pray for safe voyage and good catches. The funadama belief in wooden ships (eguribune, sabani, itazukebune, etc.) in the Ryukyu region is often influenced by the Onari-gami belief, which worships sisters as guardian deities. While the above is already known, this article focuses on the belief in trees for building ships and studies its relationship with the belief in female gods as guardian deities of ships.

Traditional shipbuilding by shipbuilders starts with the logging of trees in mountains and finishes with a launching ceremony. During this time, religious services for tree spirits and related mountain gods are performed as important courtesies. This is an example of Amami-Oshima. If we expand our scope to the Yaeyama region, there are also oral traditions (songs and ballads) that recognize trees used for building ships as female, suggesting a strong connection among trees, tree spirits, and female gods.

In the announcement of logging by shipbuilders to tree spirits and mountain gods, not only axes but also ink bottles, ink drawers and carpenter’s squares, etc. play important roles. The same applies for house builders. In building ceremonies, religious services for mountain gods and tree spirits are considered important. Shipbuilders and house builders use their tools for rituals related to their professions and sometimes for curses, demonstrating magic like shamans.

Finally, this article compares female gods related to voyaging and ships in the Ryukyu region and the belief in tree spirits while shipbuilding, with the customs of the continent and Taiwan, long since related to this region. This article mainly cites the examples investigated by Matsuo, the author, such as the Mazu belief in Taiwan’s dragon boat races, shipbuilding ceremonies by the Miao people in Guizhou and the minority in Taiwan, etc. This is only an attempt to settle the perspective with future comparative folklore in mind.

Key words: Ryukyu, Ship (boat), Female god, Tree spirit, Ships (boats) and religious beliefs in China and Taiwan